本校における海外研修旅行の歩み

SGH 海外研修旅行担当　土方　伸子

1. はじめに

SGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受けた 2014 年～ 2018 年の 5 年間、本校では海外研修旅行に関する研究開発に取り組んだ。研修先は台湾台北市であった。SGH 指定を受ける前年度にも台北研修旅行を実施しているため、6 年間の研究開発に取り組んだとも言える。

これまで本校が独自で企画し実施した海外研修旅行には、2004 年３月 22 日～ 31 日、生徒９名教員２名がオーストリアに出向いた *The Mac Robertson Girls' High School* との交流及びホームステイと 2000 年に第３学年が実施したシンガポール修学旅行がある。これらは英語科の教員主導で実施された。それに対し、2013 年度から実施されている台北研修旅行は、英語科以外の教員らで研修プログラムを作り上げたところに特徴がある。

現在は行われていないが、本校には 20 年程前、国際学級をつくるための検討委員会があり、試行的に独自の外国人入試を実施していた。この委員会には教科混在で教員の約４分の１にあたる６～７名ほどが所属し、入学してきた外国人生徒たちの日本語や教科、学校生活の世話をした。また、本校では留学生の受け入れは教科に関係なく教務部の留学生受け入れ担当教員が行っている。つまり、本校には SGH 指定を受ける以前から、国際交流に関連する事柄に対し、教員であれば誰もが関る体制をとってきた。社会のグローバル化が進む中、時代に即した望ましい体制と言えるかもしれない。

しかし難しさもあった。特に SGH としての海外研修旅行の難しさは、文部科学省から SGH の予算的支援を受けて実施される研修であるため、旅行会社が斡旋するような語学研修や異文化理解・体験を目的とした研修プログラムに生徒を乗せたら終わりとはならないところであった。研修の担当教員らは、通常の業務と並行して旅行の企画から始まり、生徒募集、事前指導、相手校との連絡調整、事後指導、報告書作成、報告会開催までを担うことになり、そこに言葉の壁も加わって必要以上に手間と時間のかかる取り組みとなった。SGH 指定以降、参加生徒たちには、「納税者が納得するような事前学習や海外研修への取り組み、報告義務が求められる。」と少々緊張感を持たせるような話をし、帰国後も報告書作成や報告会開催まで責任を持って役割を果たすよう指導をする必要があった。

試行錯誤の連続ではあったが、毎年残されたプログラム上の課題を踏まえて翌年度に改善し実施するというプロセスを踏んだことで、螺旋的にプログラムの内容は向上した。ここに６年間の海外研修旅行を概観し、総括しておきたい。なお、各年度ごとの海外研修旅行の詳細については、本校研究紀要第 59 号 2013 年度「グローバル人材育成の試み（２）－台湾研修旅行を実施して－」「平成 26 年度指定スーパーグローバルハイスクール研究開発実施報告書」第一年次～第五年次を参照いただきたい。

2. 研修内容の変遷

2.1. 研修の目的

2013 年度に実施された台北研修旅行の目的は、

1．異文化理解を進め、国際人としての教養を高める。
2．アジア圏で日本と関わりの深い台湾の歴史、文化、自然について実施に学ぶ。
3．他国の女子校と学校交流を行う。

となっていたが、2014 年度 SGH 指定以降に実施された海外研修旅行の目的は、

1．授業等での探究的な学習を通して培われた問題意識、知識や探究手法を活かし、課題設定を行い、その解決を図る能力を育む。
2．外国語によるコミュニケーション・ディスカッション・プレゼンテーション能力の向上を図る。
3．海外における国際交流・異文化体験の機会を得る。
　※　なお、本校を代表して台北市立第一女子高級中学の生徒との親睦を深め、研修終了後に他の生徒等に取組の成果普及に努める役割を担う。

となり、探究的な学習の要素が前面に打ち出されるものとなった。生徒たちは日本で行っている探究活動の成果を台湾の高校生や大学生に向けて英語でプレゼンテーションをし、ディスカッションを通じて得られた情報や意見を持ち帰り、さらに自身の探究活動に活かす、また得られた成果を日本語や英語で発信するという活動が求められるようになった。

2.2. 研修国の選定、研修担当教員および対象生徒

表 1 は、2013 年度から実施されている台北研修旅行についての概要である。

先に 2013 年度に実施された台北研修旅行について少し触れておきたい。この研修が実現したのは、2007 年、本校卒業生に関係があり台北市立第一女子高級中学（以下、北一女）とも関係のある NPO ベーシックライフインフォメーション協会（以下、ベーシック）理事の加藤美智子氏からいただいた一本の電話がきっかけであった。「北一女が本校との交流を希望している。」とのことであった。その後、その年の 12 月にまず北一女の校長他教員が来校、2009 年 11 月に北一女の生徒 20 名が来校。2010 年 11 月に本校副校長が北一女を訪問、2013 年 10 月に本校生徒 22 名（3 年生 1 名、2 年生 15 名、1 年生 6 名）が北一女を訪問というゆっくりとしたプロセスを踏んだのちに実現したものであった。このように非公式且つ個人的なつながりから始まった北一女との交流は、校内に受け皿はなく、窓口は常に副校長となっていた。従って、ベーシックからの寄付や台北駐日経済文化代表処、台湾観光協会などの強力な応援を受けて急遽決まった 2013 年度の台北研修旅行も副校長と主幹、次期副校長で旅行の企画から参加生徒の募集、事前指導から事後指導までを担当し、引率も副校長と次期副校長が行った。帰国後、参加した生徒たちの台北研修に対する評価は高く、実施すれば大きな成果が得られる手応えはあったものの、今後継続的に自立して台北研修を実施していくためには、校内に持続可能な体制を整えること、つまり予算面や受け入れ組織な

どを検討する必要があった。そのため、翌年度以降の台北研修旅行実施については一旦保留とされた。

		SGH海外研修	
	2013	2014 （SGH 第1次）	2015 （SGH 第2次）
日程	10月20日（水）～24日（土） （4泊5日）	10月22日（水）～25日（土） （3泊4日）	10月21日（水）～24日（土） （3泊4日）
渡航先	台湾：台北市	台湾：台北市	台湾：台北市 （タイ：バンコク中止）
参加生徒	22名 （3年生1名、2年生15名、1年生6名）	29名 （2年生：「グローバル総合」の講座所属生徒） 「国際協力とジェンダー」 17名 「経済発展と環境」 4名 「国際関係と課題解決」 8名	42名 （2年生：「グローバル総合」の講座所属生徒） 「国際協力とジェンダー」 16名 ※1 「経済発展と環境」 11名 ※2 「情報技術と創造力」 15名
費用の補助	一部、NPO法人ベーシックライフインフォメーション協会からの寄付	一部、SGH予算	一部、SGH予算
研修担当教員	副校長 ・主幹 ・ 次期副校長	「グローバル総合」の中の 「国際協力とジェンダー」講座担当教諭 2名	「グローバル総合」の各講座担当教諭 5名
引率教員	副校長 ・ 次期副校長	副校長 ・「国際協力とジェンダー」講座担当教諭 2名	校長 ・「国際協力とジェンダー」講座担当教諭 2名 「経済発展と環境」2名 ・「情報技術と創造力」担当
特徴的な事柄 （前年度と異なる点等）	・北一女との交流・ホームステイ・台湾の歴史や文化に触れる観光が中心のプログラム。 ・副校長・主幹・次期副校長が、授業時間外で事前から事後指導までを担当。	・SGH「グローバル総合」講座所属の生徒が対象。 ・「グローバル総合」の中の「国際協力とジェンダー」講座担当教諭らが授業時間外で事前から事後指導までを担当。 ・台湾大の学生や北一女の生徒たちに向けて探究の成果を英語でプレゼン、ディスカッションを行うことが研修の主目的となり、学習的な要素が強くなった。 ・1月バンコク視察。チュラーロンコン大学附属中等学校との交流協定締結準備および海外研修の訪問先候補地視察	・「グローバル総合」の中の「国際協力とジェンダー」講座にひも付きの形になり、所属生徒全員が対象。 しかし、 ※1 「経済発展と環境」講座のタイ研修旅行が出発直前の爆発事案により中止、台北研修に合流。タイとの交流協定締結はなくなった。 ※2 「情報技術と創造力」講座の台北研修は、お茶の水女子大学理系女性教育開発共同機構主催による海外研修として実施された。 ○事前から事後指導までを、研修参加講座の担当教員らが講座時間内に行った。

	SGH海外研修		
	2016 （SGH 第3次）	2017 （SGH 第4次）	2018 （SGH 第5次）
日程	10月19日（水）～22日（土） （3泊4日）	10月18日（水）～21日（土） （3泊4日）	10月17日（水）～20日（土） （3泊4日）
渡航先	台湾：台北市	台湾：台北市	台湾：台北市
参加生徒	30名 （2年生希望者）	24名 （2年生希望者）	31名 （2年生希望者）
費用の補助	一部、SGH予算	一部、SGH予算	一部、SGH予算
研修担当教員	海外研修担当教諭 3名	海外研修担当教諭 3名	海外研修担当教諭 3名
引率教員	副校長 ・ 「国際協力とジェンダー」講座担当教諭 ・ 第2学年担任（「経済発展と環境」担当）	校長 ・「国際協力とジェンダー」講座担当教諭 ・ 第2学年担任（海外研修担当）	次期副校長 ・ 海外研修担当教諭 ・ 第2学年担任（ 「国際協力とジェンダー」担当）
特徴的な事柄 （前年度と異なる点等）	・全ての2年生が対象。 事前から事後指導までを、新設された「海外研修担当班」が授業時間外で担当。 ・研修内容は前年度の「国際協力とジェンダー」のものを踏襲する形。 ・引率者は①管理職②総合講座の担当者③第2学年担任で構成。 × 総合講座の探究テーマと海外研修の探究テーマが異なり、大きな負担を抱える生徒が多かった。また、北一女でのプログラムが多く、肝心なディスカッションの時間を十分に確保することができなかった点が翌年度への課題。	・前年度の研修内容をほぼ踏襲する形。 ○総合講座の探究のテーマと台北研修の探究テーマを一致させるよう生徒たちに強く働きかけ、生徒たちの負担を軽減させた。 × 過去2年実施した台湾大学学生ボランティア（AISEC)との連絡調整がうまくいかず、学生が十分に集まらなかった。また、北一女でのディスカッション時間ついて、前年度よりは改善されたが、さらに改善の余地ありという結果となった。この2点が翌年度への課題。	・前年度の研修内容をほぼ踏襲する形。 × 総合講座の探究のテーマと台北研修の探究テーマを一致させるよう生徒たちに働きかけたが、結果としてテーマが異なり、負担がC38H40増える生徒たちが多くなった。 ○ 台湾大学については、学生ボランティア（AISEC)ではなく、教員間で連絡調整をしたことにより、レセプション・探究テーマのプレゼン・ディスカッション・キャンパス見学が大変充実したものとなった。また、北一女でのディスカッション時間ついても、グループ内でのディスカッション時間を十分に確保することができ、これまでの課題を解決した。

表１．2013 年度から実施されている台北研修旅行

翌年、本校が SGH に採択されたことで海外研修旅行に関わる資金的な問題は解決する見通しがたった。しかし､研修国の選定については十分な議論がなされていなかったこともあり、とりあえず SGH 初年度の 2014 年度は海外研修旅行を実施せず、準備期間とすることにした。この間、研修候補地であったタイを視察し、バンコク市内にあるチュラーロンコン大学附属中等学校と交流協定を結ぶ話を進めた。そのような中、北一女と交流協定を結ぶ話が再浮上し、結局、2014 年度も台北研修を実施することになった。この年、本校は北一女との交流協定締結が実現したのである。

急遽決まったこの年の海外研修旅行も受け皿はなく、担当は副校長そして SGH によって誕生した「グローバル総合」の中の「国際協力とジェンダー」講座の担当教員２名で担当することになった。対象生徒は2年生に限定し､「グローバル総合」選択者（定

員 40 名、アラカルト総合定員 80 名）の中から希望者 29 名が選抜された。事前学習や事務連絡などは授業時間外の放課後に行われた。研修担当教員らは、自身の講座に所属する生徒たちへの探究活動の指導を行いつつ、他講座から海外研修に参加する生徒たちの指導も行う必要があり、大きな負担を負うことになった。

2015 年度、この問題を解消するため、早々に台北研修旅行の継続実施を決めた。また、対象講座を「国際協力とジェンダー」講座に限定し、所属する生徒 16 名全員を台北に連れて行くことにした。講座ひも付きの形にしたことで事前事後指導を授業時間内に一貫して行えるようになった。しかし、この年の特別事情として、初めてのタイ研修旅行を予定していた「経済発展と環境」講座が、出発直前の爆発事案によりタイ研修旅行を中止、急遽台北研修旅行に合流することになった。また、お茶の水女子大学理系女性教育開発共同機構から「情報技術と創造力」講座へ年度途中に海外研修の予算がついたことで、これも急遽台北研修旅行に合流することになった。結局、グローバル総合講座のうち、「国際関係と課題解決」を除く全ての講座の生徒が全員参加する形となった（「経済発展と環境」でイオン・アジア・ユースリーダーズプログラム（中国天津市）に参加した生徒 6 名を除く）。前年度に引き続きこの年も計画変更に伴う慌ただしい困難な状況が生じた。しかし、事前事後指導に関しては、各講座担当教員が授業時間内に行うことができたので、生徒教員双方にとって持ち出しの時間はなく、負担は軽減された。この年の特殊事情を除けば、翌年以降も講座ひも付きの形で実施するのがよいと考えられた。しかし、この形はその講座に所属する生徒にしか海外研修のチャンスが与えられず、参加が叶わなかった生徒や文部科学省からも指摘を受けることになった。

従って、2016 年度以降はこの指摘を受けて第 2 学年全体から希望者を募る形にした。この変更に伴い校内では海外研修班を立ち上げ、事前から事後指導に至るまで、探究活動の具体的な学習指導を除く、全ての事柄を海外研修班が請け負うことになった。生徒たちの所属講座が複数にまたがるため、研修指導は一昨年度の形に戻し授業時間外で行うことになった。しかし、一昨年度と異なる点は、探究講座と海外研修の担当教員を切り分けたことで、講座担当教員らは探究の指導に専念でき、海外研修担当教員らは、過去 3 年間の研修プログラムを参考にしながら、見通しを持って計画的に事前事後指導を進めることができた点であり、双方にとって心理的な負担を抑える体制を整えることができた。

タイのチュラーロンコン大学附属中等学校との交流協定の話は、その後台北研修旅行が SGH に関係なく継続実施の見通しが立ったこと、危機管理上の観点から、教員数の少ない本校で無理に手を広げて研修国を開拓する必要はないと判断されたことにより白紙となった。

2.3. 事前学習

事前学習は、①台湾研修の中で課題研究の一環として活動するための学習、②台湾の歴史や文化、地理、現状等に関する学習、③語学学習（英語・中国語）を実施した。2013 年度は異文化理解や北一女との交流が主な目的であったため、②の調査レポート・レポート発表・台湾に関する映画鑑賞及び③の中国語学習に時間をかけ、英語学習については個人の能力に任せる形となった。2014 年度も年度途中に急遽台北行きが決定したため、SGH 初年度の海外研修旅行ではあったが、前年度を踏襲する形で事前指導が行われた。2015 年度以降 4 年間は本格的に SGH 海外研修旅行の目的に沿うよう①に重点を置いた事前指導を実施した。

2.3.1. ①台湾研修の中で課題研究の一環として活動するための学習

表２は５年間の SGH 海外研修旅行の探究テーマとグループ内の講座別人数である。

研修担当…副校長＋「国際協力とジェンダー」講座担当教員２名

2014

班	人数	テーマ	講座別人数	
1	7	「貧困」	国際協力とジェンダー	7
2	8	表象文化（特にＣＭ）におけるジェンダー～ＣＭをつくろう～	国際協力とジェンダー	8
3	4	「身近な環境自慢」	経済発展と環境	4
4	5	今後のアジア諸国への経済支援のあり方	国際関係と課題解決	5
5	5	災害時における支援活動の協力体制を構築するには	国際関係と課題解決	3
			国際協力とジェンダー	2

※　参加生徒は「グローバル総合」に所属する希望生徒から選抜

研修担当…「国際協力とジェンダー」「経済発展と環境」「情報技術と創造力」の各講座担当教員

2015

班	人数		テーマ	講座別人数	
ジェンダー	16	【全体会】	全体会後、「児童労働」と「女児の教育支援」の２グループに分かれてディスカッション	国際協力とジェンダー	8 8
		①エシカルファッションショー ②「児童労働」「女児の教育支援」について、本校生徒からプレゼン			
環境	4		ファッションと環境問題－“服”で地球を幸“福”に－	経済発展と環境	4
	2		持続可能なパーム油生産を目指して－消費者の視点から－		2
	3		循環型社会の構築－地産地消と世界農業遺産（GIAHS）－		3
	2		ゴミ問題をいかに解決するか		2
情報	15		＜講座内テーマ＞ 「Look around your world through engineer glasses.”」 ・Keywords: Technology, Attention, Students このテーマについて５グループに分かれてディスカッション	「情報技術と創造力	3 3 3 3 3

※「経済発展と環境」は受講生徒 17 名の内、６名はイオン・アジア・ユースリーダーズのプログラム（中国天津市）に参加した。

研修担当・・・海外研修班

2016

班	人数	テーマ	講座別人数	
1	3	女子教育とステレオタイプ	国際協力とジェンダー	2
			国際関係と課題解決	1
2	3	世界の女子教育	国際協力とジェンダー	2
			音楽のグローバル化	1
3	4	女性の社会進出：日本と台湾を含む他国との比較	国際協力とジェンダー	3
			言語に依存しない情報発信	1
4	5	食品ロス	経済発展と環境	5
5	2	再生可能エネルギー	経済発展と環境	2
6	4	防災・減災	国際関係と課題解決	4
7	3	人口集中と地方創生	国際関係と課題解決	3
8	3	臓器移植	生命・医療・衛生	3
9	3	情報技術と創造力	情報技術と創造力	3

研修担当・・・海外研修班

2017

1	4	非正規雇用とワーキングプア	国際関係と課題解決	4
2	2	GENDER ISSUES IN TAIWAN AND JAPAN	国際関係と課題解決	2
3	2	The Relationship between Child Soldiers and Education	国際関係と課題解決	2
4	3	女性の労働と社会参画	国際協力とジェンダー	3
5	3	発展途上国と先進国間の教育格差	国際協力とジェンダー	3
6	2	都市の洪水とその防災	経済発展と環境	2
7	5	国産間伐材の利用	経済発展と環境	5
8	3	グローバル社会に対応した駅づくり	情報技術と創造力	1
			言語に依存しない情報発信	2

※ 2017 年度の音楽のグローバルは開講されず

研修担当・・・海外研修班

2018

班	人数	テーマ	講座別人数	
1	4	身近な病気のケア	生命・医療・衛生	4
2	3	避難所におけるストレス軽減	情報技術と創造力	1
			言語に依存しない情報発信	1
			音楽のグローバル化	1
3	3	災害時の医療	生命・医療・衛生	3
4	4	森林伐採と熱中症	経済発展と環境	4
5	4	台湾と日本の食品ロス	経済発展と環境	4
6	4	表象におけるジェンダー	国際協力とジェンダー	3
			生命・医療・衛生	1
7	3	アジアにおける教育比較	国際協力とジェンダー	2
			国際関係と課題解決	1
8	4	選挙の投票率をどう上げるか	国際協力とジェンダー	2
			国際関係と課題解決	2
9	2	難民の定住	国際関係と課題解決	2

表２．５年間の SGH 海外研修旅行の探究テーマとグループ内の講座別人数

2014、2015年度は探究Ⅰの講座担当教員の指導の下、講座内でグループをつくり(2014年度の５班のみ講座混合)、探究Ⅰのテーマで北一女とのプレゼン・ディスカッションに臨んだことがわかる。しかし、2016年度以降、探究Ⅰの講座とは独立して海外研修担当班による指導が行われるようになったため、生徒たちに講座縛りの意識が薄れ講座混合のグループが増えた。これにより同時期に探究Ⅰと海外研修の２つのテーマで探究を行うという大きな負荷を負う生徒が多くなってしまった。

この点を改善すべく、2017年度は講座担当者と海外研修班が緩やかな連携を図り、海外研修は探究Ⅰのフィールドワークの場でありテーマに一貫性を持たせるのが良い、と双方から強く働きかけたことにより、講座から１名しか参加がなかった「情報技術と創造力」を除いては全て講座内でグループをつくることができた。SGH最終年度の2018年度は、前年度のように指導はしたものの、生徒たちの希望も尊重した結果、一昨年度のように講座混合グループが増えてしまった。しかし、これにより明らかになったことは、探究Ⅰのテーマと海外研修の探究テーマを一本化あるいは限りなく近づけることは、生徒の負担軽減になるだけでなく、海外研修が探究Ⅰのフィールドワークの場としての機能を果たし、その後の探究活動への意欲を高める有効な手段になるということであった。表３は、帰国後のアンケート結果の一部であるが、「関心を持ったテーマについて自主的に積極的に学ぶようになった」の割合が、2017年度は秀でて高いことがそのことを示している。

項目	2018年度(SGH５年次)		2017年度(SGH４年次)		2016年度(SGH３年次)		2015年度(SGH２年次)	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
海外のニュースや記事を積極的に視聴するようになった	51.6	48.4	45.8	54.2	53.3	46.7	54.8	45.2
関心を持ったテーマについて自主的に積極的に学ぶようになった	38.7	61.3	70.8	29.2	36.7	63.3	9.5	90.5
「持続可能な社会の探究Ⅰ」の活動により積極的に取り組むようになった	54.8	45.2	70.8	29.2	66.7	33.3	-	-
様々な教科の学習により積極的に取り組むようになった	38.7	61.3	33.3	66.7	53.3	46.7	47.6	52.4
語学力を高める努力をするようになった	77.4	22.6	95.8	4.2	93.3	6.7	71.4	28.6
英語の検定試験を受けるようになった	29.0	71.0	16.7	83.3	23.3	76.7	11.9	88.1
英語以外の検定、資格試験を受けるようになった	6.5	93.5	4.2	95.8	0.0	100	0.0	100
研修で知り合った友人と連絡を取り続けている	64.5	35.5	79.2	20.8	80.0	20.0	71.4	28.6

表３．台湾研修参加後の行動の変化

2.3.2. ②台湾の歴史や文化、地理、現状等に関する学習

2013年度は台湾に関する事前の調べ学習とレポート発表、「台湾人生」「冬冬の夏休み」「日本統治下の台湾・南進台湾」などの映像を世界史教諭の解説の下鑑賞するなど、時間をかけて台湾事情についての学習を行った。2014年度以降は探究活動に関する学習に時間をかける必要があり、2014、2015年度は日本史教諭による日台関係史の講義を聞いて理解する簡略化されたものになった。しかし、探究活動だけでなく台湾についての正しい理解も深める必要があると考え、2016年以降は、まず応募の段階でこちらが提示した台湾に関する読書リストの中から２冊以上読み、読書レポートを応募書類と一緒に提出させることにした。研修候補生になってからも、このレポートの内容が不十分だったり、誤った理解をしている生徒たちには再度読書レポートを再提出させるなど、日本史教諭が丁寧に指導を行った。さらに2017、2018年度は、夏休みに外部から講師を招き台湾事情について質疑応答含め２時間ほどの講話をしていただくことにした。講師は本校卒業生で学習院大学国際研究教育機構ＰＤ共同研究員の武藤那賀子氏（2017年度）、三井物産アジア支店の取締役などを勤められ現在は台湾協会理事をなさっている高寛氏であった（2017・2018年度）。高氏は、本校副校長がイオンアジアユースリーダーズの海外研修プログラムに引率した際知り合った人物から紹介をいだたいた。

ここで聞いた講話が現地の台湾市日本人会／日本工商会総幹事の講話につながり、生徒たちにとって台湾に関する理解を深めるのに有益な機会となった。

2.3.3. ③語学学習（中国語・英語）

中国語の学習については、2013年度から毎年ほぼ同じ形で実施した。お茶の水女子大学の協力を得て、北京語が話せる留学生を紹介していただき、出発前に中国語でのあいさつや自己紹介ができるレベルの学習会を２回実施（各回１時間で生徒は最低１回は参加）した。台北研修初回の2013年度だけは、これに加えてベーシック加藤氏の知人である張瑞銘先生が来校され、交流会で歌う予定の「阿里山之歌」「望春風」の歌唱指導も受けた。

英語学習に関しては、2013･2014年度は実施していない。2015年度は出発前に３日間（各40～60分）設定され、日常会話レベルから英語のディスカッションにおける会話術まで幅広くおさらいするような内容であったが、引率をした教員らから現地でのディスカッションを充実させるためにはもう少し英語力が必要であるとの報告を受け、2016年度以降SGH予算で外国人講師を雇い、放課後に定期的な英語学習会を実施することにした。内容は６・７月は語学グループで週１回（45分）日常会話レベル、夏休みは希望制、9・10月は探究グループで１・２回（45～90分）探究成果のプレゼンテーション指導であった。その他、2015・2016年度にはお茶の水女子大学が大学生向けに実施する英語のプレサマープログラムへの参加を必須（５日間のうち３日）としたが、さすがに留学生や大学生に混ざり一日中英語漬けの研修を最低３日間受講するというのは高校生にとって負荷が大きく、その割に成果が得られなかった

生徒たちからは不評であった。そのため、このプログラムは中止し、その代替として2017・2018年度はお茶の水女子大学の留学生とフリートークをする形の英語学習に変更、外国人講師の授業とは別に各グループ週1回設定し生徒たちに英会話の機会を確保した。

台湾で行う英語のプレゼンテーションのための資料作成や発表原稿作成は、外国人講師に全面的に添削指導をしていただき、生徒たちには大変勉強になり心強いサポートを得ることができた。

2.4. プログラム

市内観光（順益台湾原住民族博物館・故宮博物院訪問他）、台北市日本人会／日本工商会表敬訪問および講話、台湾大学（2013年度は国立台湾戯曲学院）見学及び学生との交流、台北第一女子高級中学訪問、ホームステイをプログラムの骨格としながら、各年度の事情に合わせたプログラムとなっている。

2.4.1. 北一女との交流プログラム

表4は台湾における6年間の研修内容である。北一女との交流は台北研修旅行の目玉であった。北一女は9月の新学期に生徒募集をするため、10月中旬の台北研修直前にならないとホストファミリーが決まらない。また、交流プログラムの内容も本校がやりたいことと北一女がやりたいことをすり合わせるため出発直前までその内容が確定しないという毎年実に緊張感を強いられるプログラムであった。しかし、現地でホストファミリー不在やプログラム不備で困ったということは一度もない。北一女の先生方もぎりぎりまで生徒の探究指導や受け入れ準備に追われていたことと推察できる。

表4を見ると初年度から2016年度にかけて少しずつプログラム内容が充実していったことがわかる。しかし、これにより肝心な探究成果についてのプレゼンテーション・ディスカッションの時間が十分に確保できなくなってしまった。時間をかけて準備したプレゼンに見合うだけのディスカッションができなかったことに不満を持つ生徒も多かった。そこで2017年度は小グループでのディスカッション時間を十分に確保したい旨北一女に強調して伝えた。しかし、北一女の研修担当教員が代わったこともあり、メールのやり取りだけでこちらの意図を伝えるのは難しく、確かに前年度よりは改善されたものの、まだ小グループでのディスカッション時間は不十分で、見栄えの良い全体会プレゼンテーションに時間を割く形となってしまった。SGH最終年度に向け、海外研修担当班にとってこの改善が最優先課題となった。

タイミング良く翌年5月に北一女が来校したため、担当教員が膝を突き合わせて交流プログラムを練る時間を持つことができた。この機会のお陰でSGH最終年度にようやく満足のいく交流プログラムが実現した。

			SGH海外研修	
		2013	2014 （SGH 第1次）	2015 （SGH 第2次）
研修内容	1日目	桃園站（台湾新幹線乗車体験） 台北市内観光 ①順益台湾原住民族博物館 ②龍山寺	台北市内観光 ①順益台湾原住民族博物館 ②国立故宮博物院見学	台北市内観光 ①順益台湾原住民族博物館（英語ガイドあり） ②国立故宮博物院見学
	2日目	台北市内観光 ①国立故宮博物院 ②忠烈祇 ③中正記念堂 ④台北民芸品にて買い物とお茶セミナー ⑤二二八和平公園散策 ⑥九份老街散策	台湾女性企業家による講話 中正記念堂見学 台北市日本人会／日本工商会表敬訪問 ①事務局長講話 ②日本人女性起業家講話 台湾大学キャンパス見学及び交流	終日、班別行動 「国際協力とジェンダー」講座 台湾女性起業家講話・台北市日本人会／日本工商会表敬訪問事務局総幹事講話・台湾大学生ボランティア（AISEC）によるキャンパス見学及びディスカッション 「経済発展と環境」講座 台北市交通局・YouBike試乗・北投地熱谷 「情報技術と創造力」講座 内湖科学園区・Pacific Image Electronics・新竹サイエンスパーク
	3日目	台北青果市場（南大門）視察・散策 台北第一女子高級中学訪問 ①台北賓館、総統府見学 ②歓迎セレモニー ③授業＋HR＋課外活動参加 ④交歓会 ホームステイ （北一女生徒宅へ各自移動）	台北第一女子高級中学訪問 ①台北賓館、総統府見学 ②探究テーマ別プレゼンテーションとディスカッション （課題：ジェンダー・国際協力・環境・政治・経済） ③交歓会 ホームステイ （北一女生徒宅へ各自移動）	台北第一女子高級中学訪問 ①全体テーマ「児童労働」「女児の教育支援」について、本校生徒によるプレゼン ②本校生徒によるエシカルファッションショー ③探究テーマ別プレゼンテーションとディスカッション ④ドキュメンタリー映画「湾生回家」鑑賞 ⑤④を踏まえてのディスカッション ⑥交歓会 ホームステイ （北一女生徒宅へ各自移動）
	4日目	ホームステイ （北一女に再集合） 新竹サイエンスパーク 国立台湾戯曲学院見学	ホームステイ （北一女に再集合） 帰国	ホームステイ （北一女に再集合） 帰国
	5日目	台北市日本人会／日本工商会表敬訪問・会長講話 帰国		

			SGH海外研修	
		2016 （SGH 第3次）	2017 （SGH 第4次）	2018 （SGH 第5次）
研修内容	1日目	台北市内観光 ①順益台湾原住民族博物館（英語ガイドあり） ②国立故宮博物院見学	台北市内観光 ①順益台湾原住民族博物館（日本語ガイドあり） ②国立故宮博物院見学	台北市内観光 ①順益台湾原住民族博物館（日本語ガイドあり） ②国立故宮博物院見学
	2日目	台湾女性企業家による講話 台北市日本人会／日本工商会表敬訪問・総幹事講話 台湾大学訪問 ①台湾大学生ボランティア（AISEC）によるキャンパス見学 ②台湾大学生（AISEC）への探究テーマプレゼンとディスカッション	台湾女性企業家による講話 台北市日本人会／日本工商会表敬訪問・総幹事講話 台湾大学訪問 ①台湾大学生ボランティア（AISEC）によるキャンパス見学 ②台湾大学生3名（AISEC）への探究テーマプレゼンとディスカッション	台湾女性企業家による講話 ・台北市日本人会／日本工商会表敬訪問事務局総幹事講話 台湾大学訪問（日本文化研究中心.林立萍教授による受入れ） ①文学部校舎内にてレセプション ②台湾大学生（12名）への探究テーマプレゼンとディスカッション ③台湾大学生によるキャンパス見学
	3日目	台北第一女子高級中学訪問 ①台北二・二八紀念館見学 ②蔡焜霖氏講話「白色テロの体験から人権を考える」 ③北一女の運動会練習（リレー）見学 ④②を踏まえた人権についてのディスカッション ⑤課題研究テーマ別プレゼンテーションとディスカッション ⑥⑤の成果を共有するための領域内プレゼンテーション ⑦交歓会 ホームステイ （北一女生徒宅へ各自移動）	台北第一女子高級中学訪問 ①総統府見学 ②探究テーマ別プレゼンテーションとディスカッション ③②の成果を共有するための全体会プレゼンテーション ④交歓会 ホームステイ （北一女生徒宅へ各自移動）	台北第一女子高級中学訪問 ①台北賓館見学 ②探究テーマ別プレゼンテーションとディスカッション ③交歓会 ホームステイ （北一女生徒宅へ各自移動）
	4日目	ホームステイ （北一女に再集合） 帰国	ホームステイ （北一女に再集合） 帰国	ホームステイ （北一女に再集合） 帰国
	5日目			

表４．台湾における６年間の研修内容

2.4.2. その他のプログラム

綱渡り的なプログラムと言えば、台湾大学の学生との交流もある。2015 年度、SGH の海外交流アドバイザーである加藤陽美氏から紹介された台湾大学の学生ボランティア団体 AISEC は、初年度はどちらにも関係のある学生が仲介してくれたお蔭で大変充実した交流ができた。しかし、翌年度以降両者をつなぐものはメールだけとなり、出発直前まで AISEC 代表の学生と連絡がつかず、プログラムの代替案を準備する必要があるかと毎年気を揉んだ。結果的には学生と交流できキャンパス見学もできたが、現地で学生たちに会って受けた印象は、毎年交代する AISEC 代表の間でこの交流に関する引継ぎがなされておらず、事情がよくわからないまま本校の生徒たちを受け入れ、探究成果のプレゼン練習につきあってくれていたといった感じであった。学生たちは直前まで試験期間で代表の学生もボランティアを集めるのが難しかったと言っていた。個人的なつながりをきっかけとした話を公式なルートに乗せることの難しさを感じるプログラムであった。

この点を改善するため、2018 年度は思い切って夏休みに台湾事情の講話をして下さる高寛氏に台湾大学の教員を紹介していただけるよう依頼したところ、即、台湾大台湾大学日本文化研究中心の林立萍教授をご紹介いただくことができた。その後の教員間の事前のやり取りは非常にスムーズで、現地では台湾大学文学部の伝統ある建物内にディスカッションの場を設けていただき、12 人の学生ボランティアの参加も得て、本校の生徒たちは質の高いディスカッションを行うことができた。これもまた SGH 最終年度に満足のいく交流プログラムができたということである。

3. 台湾研修後の意識の変化

表 5 は帰国後の意識の変化である。全体的に「はい」の数値が高く、このことから海外研修を実施することは生徒たちの意識の変容に肯定的且つ大きな影響を及ぼすことがわかる。さらに経年変化を見ると、多少数値の上下はあるものの、年次が上がるごとに生徒たちの肯定感が上昇していると捉えることができる。これは毎年前年度に残された課題を踏まえてプログラムの改善を重ねた結果と言えるのではないだろうか。

項目	2018年度（SGH 5年次）		2017年度（SGH 4年次）		2016年度（SGH 3年次）		2015年度（SGH 2年次）	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
海外の文化や歴史への興味・関心が広がった	100.	0.0	100	0.0	96.7	3.3	97.6	2.4
日本の文化や歴史への興味・関心が広がった	90.3	9.7	87.5	12.5	83.3	16.7	71.4	28.6
科学技術、ITなどへの興味・関心が広がった	38.7	61.3	20.8	79.2	43.3	56.7	28.6	71.4
国際政治や外交などへの興味・関心が広がった	87.1	12.9	79.2	20.8	80.0	20.0	64.3	35.7
国際的な経済活動への興味・関心が広がった	87.1	12.9	79.2	20.8	76.7	23.3	59.5	40.5
留学したいと思うようになった	80.6	19.4	70.8	29.2	86.7	13.3	54.8	45.2
海外で働きたいと思うようになった	54.8	45.2	29.2	70.8	46.7	53.3	23.8	76.2
語学力を高めたいと思うようになった	96.8	3.2	100	0.0	100	0.0	97.6	2.4
誰とでもコミュニケーションできる積極性を持ちたいと思うようになった	93.5	6.5	100	0.0	100	0.0	95.2	4.8
特に変化はなかった	※9.7	80.6	0.0	100	0.0	100	4.8	95.2

表５．台湾研修参加後の意識の変化

4. まとめ

本校の台北研修旅行は私的な一本の電話から始まった。細く長く時間をかけて続いていた北一女との交流は、SGH採択によって急展開、発展していった。海外研修が単なる異文化理解や北一女生との交流に留まらず、日台の高校生や学生が共通のテーマについて意見や情報交換をするという協働的な学習活動が加わり、双方にとって好ましい研修プログラムになった。北一女との交流プログラムのみならず事前学習から事後報告に至るまで、帰国後の生徒や引率教員らの声を参考にしながら毎年改善を重ねた。帰国後に実施したアンケートを見ると生徒たちの海外研修に対する評価はかなり高い(結果の詳細は前述の各報告書に譲る)。後半３年間海外研修を担当した者として、立ち上げ期の苦労を思うとき実に感慨深いものがある。海外研修担当に英語科不在という事情を抱える苦労は確かにあったものの、だからこそ外部に応援を要請するノウハウを得ることができた。外部とのつながりが新たなつながりを生み出し研修内容をより良いものにすることができた。まさに研究開発であった。SGHとしての海外研修旅行は完了したが、台北研修旅行は継続することが決まった。この６年間で得られたノウハウを今後に生かし、自費で参加する生徒たちが十分に満足できるような研修プログラムを今後も検討していきたい。